

ロシア・メンシェヴィキの系譜とペレストロイカ (三)

北島平一郎

目次

- はしがき
- 五 メンシェヴィキとロシア社会民主主義  
ロシア革命の二つの系譜  
教条的マルキシスト  
ストルブ (Dyott Struve)、ツガン・バラノウスキー (M.I. Tugan-Baranovsky)  
共産党宣言
- 六 社会民主主義者カール・マルクス  
マルクスと革命  
マルクスと平和主義革命  
マルクスと議会主義、総選挙制
- 七 メンシェヴィキ諸流派  
経政家  
プレハノフ (G. V. Plekhanov)  
マルトフ (Julius Martov) \*ポレスォフ (A. Potresov)

ロシア社民思想とプロレタリア独裁

ま と め

は し が き

新春早々には、米ソ両国の結合はより緊密であった。意識調査によると、米国人の親近度は、ソ連人に四八%（前年調査二八%）、日本人に三〇%（六五%）ということであった。しかし問題は、山積している。シュワルナゼ外相の辞意表明は、ソ連軍部のイラク親近感と、人民代議員強硬派の対イラク・ソ兵派遣絶対反対宣言にあったといわれている。その根は深い。そして以来一ヶ月半。今や世界は、湾岸戦争の真只中。世界史は、これまでの様相を一変しようときえしている。時間ほど恐ろしいものはない。ゴルバチョフ大統領の登場以来、世界新時代の牽引車であったペレストロイカが、そして不幸、早くも鼎の軽重を問われようとしている。ソ連邦内バルト三国の叛乱である。彼等は、ソ連邦からの独立を目ざし、これには、ロシア、カザフ、白ロシア、ウクライナ、グルジア各共和国も同調的である。ゴルバチョフ大統領は、大統領令による戒厳令布告、閣僚会議の大統領直轄、連邦委員会(Federation Council)、安全保障委員会(Security Council)の大統領議長制等を新たに打出し、英国女王と米大統領の権限を一身に集めるスターリン以上の権力集中をはかるといわれるものをもってこれに対抗している。しかしバルト三国は、ゴルバチョフ大統領の連邦国家制国民投票に対し、独立の是非を問う全住民調査を實行しようとし、リトアニア共和国は、新血の日曜日（一月一三日）を経て、ゴルバチョフの無効宣言を尻目にこれを二月一〇日、実行した。賛成九〇・四八%、反対六・六%というのが、その結果といわれている。ゴルバチョフ大統領は、かつてリンカーン大統領が、米合

衆国分裂の危機に逢着したのと同様の立場に立たされたといつて、これは、決して過言ではない。この情勢下、米国では、早くもゴルバチョフ政権との関係再検討が云々された(二月六日議会公聴会)。鉄のカーテンをたち切り、東西ドイツの統一をなしとげる原動力となったペレストロイカ。その対外面に於ける成功に比し、それは、対内的には、尚、経済問題の行詰りで、国情は明日をも知れない状況と伝えられる。この面ではペレストロイカによって資本主義と市場経済の導入に踏切ったゴルバチョフ政権であるが、資本の蓄積を欠くソ連で資本主義への移行は、果して可能であろうか。予断を許さない。例えば、六五〇兆円の株価の上下変動に平気で耐え得られる日本経済とどのように比較できるであろうか。資本とは、直接、労働力と原料を購入できる貨幣(有効)の謂で、それ以外の意義を持たないが、少々の物質はあっても貨幣を蓄積していかないソ連経済に資本主義への明日はない。

レーニン・スターリン主義が、ツァーリズム・ロシアから直ちに集団農場(sovkhoz, kolkhoz)、強制労働制の採用に踏切ったことは、資本主義の幼稚であったロシアでは、絶対正しかった(人道的見地を捨象すれば)。追いつけ追いこせの五ヶ年計画の繰返しは、立派にその役割を果した。しかしその労働のエネルギーは、総て軍備に投入されてしまった。その再軍備の意味は、一九三五年にヒトラー・ドイツの行ったそれとは異なる。資本主義経済の中で実行されたヒトラーの軍拡は、ドイツ経済の活性化源となった(そして戦争へ直結した)。ソ連の軍備偏重経済は、市場経済を全く欠いて、ただ、国家と労働者との関係だけとなり、製品ができて消費されるだけとなった。即ち流通と利潤を欠いた。利潤なきところ蓄積はなく、蓄積なきところ、投資はなかった。レーニンやスターリンは、パルテノンを建てることもなく、春宮を営むこともなかった。ツァーリズムの建てた宮殿と教会が、それとして利用されるだけであった。それはローマのラチフンデウム(Latifundium)経済であった。集団農場、強制労働の犠牲者二千万

説  
といわれる死屍の上にロシア・ラチフンヂウム生産が打ちたてられたのであった。

論

重商主義もなく、コロニアリズムもなく、英国の大規模囲い込み (Enclosure)、またプロシア・ユンカー (Prussian Junker) の疑似ラチフンヂウムもないソ連経済に資本主義の本源的蓄積のあるはずはなかった。本源的蓄積を貨幣の形にして利潤を稼ぐのが資本主義経済であった。共産主義、社会主義が、蛇蝎の如く嫌った利潤が、実は、資本主義の中核であった。労働力の造出するエネルギーの余剰価値は、利潤の形で、個々の資本家の手元に大きく蓄積され、消費をのみ目的として労働者の手元に小さく分け与えられた。しかしこの大きな余剰価値の蓄積が、資本主義の拡大生産を可能にし、そこからのみ資本主義は無限 (infinity) に発展し得たのであった。農村コミュニティの発達、ロシアに於ては素晴しかった。オープン農業生産は、ロシアに於て生々と活動していた。それが、集団農場制にかわり、強制労働制となった。生産物、製品の流通と利潤を稼ぐ市場経済へのそこからの移行は、ソ連となつて完全に絶ち切られてしまった。そして七四年間、こんどは、そのラチフンヂウム経済が、ペレストロイカの名で消去された。それは善である。その意義は大きい。しかしその後には、ソ連には、資本主義もなく、ラチフンヂウムもなく、そして、ペレストロイカによる資本主義と市場経済への移行が華々しく叫ばれているだけであるという状態となつてしまったのであった。それが、ソ連、今日の現実である。

本稿では、前稿 (大阪経済法科大学法学論集 (以後法学論集) 一三三号、拙稿、「ロシア・メンシェビキの系譜とペレストロイカ」(二)) につづいてロシア・メンシェビキと社会民主主義理論、実践の關係解明を試みる。趣旨は前拙稿(一)、(二)のべたと同様と御理解たまわりたい。ただ特に本稿に於ては、マルクス (Karl Marx) が、実は、社会民主主義理論に基づく社会、国家改造を明確に唱道していたという点に焦点をあてることとなる。即ち、マルク

スは、彼が、生涯一度も口にすることはなかったであろうマルクス・レーニン主義というテーゼに於て、その理論の一面だけを強調され、あの有名な労働者にとって、「失うものは鉄鎖のみ」という一言が強調されすぎたのではなからうかという問題を浮かび上がらせたい、と庶幾するということである。これはひいては、社会主義（経済、政治、社会、国家）理論の大宗としてのマルクスの多面性に光をあて、それを浮かび上がらせることもなろう。ヘルゼン（A. Herzen）、チェルニシウスキー（N. Chernyshevsky）と時代を同じくするマルクスの思想体系のなかには、実に様々の思考形態が存することはいうまでもない。これらを、マルクス・レーニン主義の一本テーゼからときはなつて、自由に、オープンに研究することが、二一世紀に向かつての大きな社会経済政治に対する課題とならなければならぬ。マルクス理論なければ、そしてまた社会主義的動員なければ、それこそ資本主義は、我利我利の利己追求に走つて失うものは鉄鎖のみとなつた労働者とともに自ら晝闇の吊鐘のなかに消え去つたであろう。資本主義の所謂健全性と人間の発展のために、社会主義理論は、不可欠の存在であつた。これを忘れるべきでない。この意味に於て、マルクスの多様性が探究されなければならず、ただマルクスをレーニンと結びつけるだけでなく、その資本主義的理論的發展として、ケインズ（J. M. Keynes 1883-1946）、ラスキ（H. J. Laski 1893-1950）、E・H・カー（E. H. Carr 1892-1982）等との思想的、思考的系譜の研究が進められなければならないのである。この大命題は、もとより浅学をよくするところではない。ただここには以上をあげつらうことによつてマルクスの社会民主主義理論と目されるものの一指を染めるのみである。以上につき伏して大方の御叱正を乞ひ上げ、前稿のはしがきにふれた研究にすすむことを銘肝し、これに他日を期して、ここに拙稿の一旦の筆を擱く。

毎日新聞、一九九一年一月一日、朝刊。および一月、二月の各新聞の報道記事。Time International, December

31, 1990, No.53, pp. 6-11, March 12, 1990, pp. 10-33, Jan. 7, 1991, pp. 47-49, & February 4, 1991, pp. 44-48. The New York Times, weekly review, December, 30, 1990, p. IE 3. & Jan. 20, 1991, p. IE 5.

一九九一年二月一日、平成<sup>4646123</sup>辛未の穏やかな建国記念日、大阪上本町の寓居にて、筆者識す。

論

## 五 メンシエビイキとロシア社会民主主義

### ロシア革命の二つの系譜

先述した思想的流れの中核をなすものは、勿論、最大公約数的に革命による社会、国家体制の変革であることは、いうまでもない。しかしてこの流れのなから直接的に生れてくるものは、ロシア・ジャコビンズム (Russian Jacobinism) とボルシエビイキ的思考の一时的否定である。即ちロシア革命を目ざすけれども、過激なる直進をさけて進もうというそれである。ボルシエビイキ一党独裁の確立という後の歴史から眺めれば、この現象は、勿論、先へのべた意味で、ロシア革命の系譜に反する流れである。だが、一応、このボルシエビイキと、共産党一党独裁の何十年間の激烈な経過の後、一九八五年にロシアに現れたゴルバチョフ (Mikhail Gorbachev) 政権の改革精神 (Perestroika) をみるとき、そこにやはり、ロシアにも西欧的思潮と社会民主主義の伝統と系譜の否定すべからざるものが大きく存在していることを感得せざるを得ないのである<sup>(一)</sup>。

レーニンが、経政家 (Economists) と名付けた、そこには、人民党のなかに、強い西欧志向の流れがあり、これと裏腹をなすタカチェフ (P. N. Takachev) に代表された「人民の決意党」(People's Will) 的テロリズムの払拭がある。そして何よりも一九一七年のロシア革命そのものが、所謂二段階革命形式をとって、ツァーリズム独裁の打

倒、ケレンスキー政権の樹立、そしてボルシェヴィキ第二革命の勃発、その成功、社会主義体制の成就という歴史がつくられるところに、反ボルシェヴィキ思潮の、そしてそれにもかかわらず、最後に革命を目ざす思考体系の根強い一般性がある。二段階革命が、意図的、戦略、戦術的に生起したということは、考えられない。はじめに社会民主主義的革命を起し、その後その成果をボルシェヴィキ革命によってその陣中にとりこんでしまうというのは、本来ものごとの性行からすれば、ボルシェヴィキ革命論の範疇に属するものでなければならないからである。二段階革命を意図的、戦術的に起すということを社会民主主義革命派のなかから主張することは、この意味では、あってはならないのである。<sup>(2)</sup>

### 教条的マルキシスト

このロシア・ジャコバニズムとボルシェヴィキ思考の他のカテゴリーをすべてメンシェヴィキ (Menshevik) という風と呼ぶのが、ボルシェヴィキ革命の勝利とロシア共産党一党独裁制確立後のロシア史のなかの定説となっていく。したがって抽論に於ても、この漠然たる広汎な呼称を使わねばならない。

すべてのロシア革命の思潮とその実践が、人民党のそれらのなかから生れ、流れ出たものであることは否定できない。レーニンもこの点、決して例外ではない。彼があらわし、初期ボルシェヴィキ革命の経典として大きな意義をもった「我等何をなすべきか」(What is to be done?) は、全く同名の著書をあらわした人民党創建者のチエルニシウスキーに彼が傾倒していた結果にはかならない。したがってボルシェヴィキ革命の系譜とメンシェヴィキ革命の系譜とは、ともに正統なロシア革命の本流であるといつてよく、<sup>(3)</sup>ゴルバチョフの現れた後のロシア史では、「……であると言わなければならない」ということに相なるであろう。いずれにしても、ボルシェヴィキ史観につらぬかれてい

たロシア史は、ゴルバチョフ以後、彼の政權担当の期間、もしくは、その長さとその後への彼の影響の下に、書きかえられなければならないと考えられる。

人民党理論は、農村コンミュニンの潜在的社會主義適應に眷宥するあまり、資本主義の出現を社会的惡とさえみなし、農村コンミュニンから直ちに社會主義への理論構成から資本主義に、ザ・ストップをかけるという反轉的經濟史觀となる。ここに於ては、歴史の進歩はなく、歴史そのものもなくなってしまう。ここにロシア資本主義の發展に寄与しながらそこには、究極的に革命を以て社會改革を目ざす理論が形成されなければならない。この点でそれは、先にみた如く、革命の二段階思想と戰術論となり、プレハーノフの言説と主張のなかにそれがある。そしてこれを受けてロシアには、社會民主主義的主張として革命二段階説をふくむ、西歐型自由と平等、そしてその枠組のなかで發展する資本主義を謳歌し、これを推進する説があらわれる。そのにない手が、「教条的マルクス主義者」(Teagal Marxists)と「經政家」(Economists)と呼ばれる人々である。<sup>(4)</sup> 彼等は、經濟的發展を主張し、資本主義の盛行を容認する。そしてこのための市場原理、一般的商業、工業の倫理、商品經濟に固有な商品の運動を軸とする經濟活動の自由、商品価値と交換の基盤原理としての平等を考える。ここからこの發展のための直接的テロリズムよりは、改革を志向し、人間活動の自由と平等、法の支配を主張し、労働組合の發達を通じて經濟活動の円滑化と發展をはかり、改革的デモクラシー・プログラムから複数政党による議會活動をさへ容認するに至るのである。こういった思考や活動が、後にメンシェビキとして総合的にとらえられるグループ活動を生み出す。

ロシアに於ける經濟主義の主張は、世紀の轉換点に於て流入、盛行したマルキシズムの影響であった。ロシアでは屢述の如く、人口の八割以上が農民であり、農民の不满が、ツァーリズム独裁への抗議と相まってポピュリスト運動



となり、「人民の決意」党のテロリズムを生み出すが、そのため培われた革命精神が、産業労働者に伝播し、受け継がれて、最後彼等による革命活動となる。その場合、経済主義の言説と改革志向の精神醸成は、マルクス主義の盛行によつた。マルクス主義は、ロシヤ資本主義のかんりの発達、産業労働者数が、三百万人から四百万人の間へと増加した世紀の転換点にロシヤに流入して定着する。

### 共産党宣言

マルクス主義のロシヤでの受入れと伝播に寄与したものは、まず「教条的マルクス主義者」の一団であつた。彼等は先へのべた経済主義の見地に立脚したが、ここで重大なことは、彼等もやはり、マルクス主義にのつた革命派であり、究極に於ては、ロシヤに於ける革命を目ざし、その道程として革命二段階説に根本的に立脚していたことであつた。ここに於てこれも先にふれた如く、ことはなお、複雑である。そもそも革命二段階説が、結果としてそうなることは理解できるとしても、果して戦術戦略としてこのことが成り立ち得るのであるか。大きな疑問である。しかし彼等が、教条主義といわれるように、この主張は、マルクスの主張に依拠したものであり、すくなくとも、その初期のそれには、その主張が、厳然として存在するといわれるのである。それは、マルクスの「共産党宣言」のなかにみられる。いまカー (E. H. Carr) の言説によつてこれをみると次の如くなる。

「共産党宣言」は、連続段階による革命を予定した。第一段階。ブルジョア革命は、封建秩序と絶対主義の残滓を払拭し、ブルジョア民主主義とブルジョア資本主義を確立する。附随的現象として産業プロレタリアートが生じる。次いで、プロレタリアートは、ブルジョア民主主義によつて規定された条件の下で自らを組織し、ブルジョア資本主義を打倒する最終革命に進み、社会主義を確立する、と。

だがしかし、この段階革命論は、果してマルクス自身、二段階的革命論と考えてこのテーゼを発表したのかどうか。これも甚だ疑問である。ロシア革命の現実が、二月革命のブルジョア政権樹立、一〇月革命のプロレタリア政権確立という、一見、ブルジョア革命と、プロレタリア革命が、画然と区別して地上にあらわれ、順を追って成就していった如くみえることから、このテーゼが真実を帯びる如くであるが、しかし、マルクス自身は、これを、資本主義が発達するためには、その市場原理から生産、流通、消費の商品運動の盛行のため、封建的規制と制約がとり除かれねばならず、この意味で封建的政権と制度の打倒のための革命が必要であり、これを以てブルジョア革命が成就されて、その社会が出現する。その原理は、市場経済と商品流通の至上属性である自由と平等である。しかし、このブルジョア革命の成功とその成熟の裏には、これをくつがえす運命(?)をになうプロレタリアートの出現と生長があり、資本主義社会発展が爛熟して、資本の独占が、最後金融寡頭政治を生むとき、このプロレタリアートが、失うべきものは、鉄鎖のみとしてこのブルジョア社会を打倒し、社会主義を建設して、今度こそ人間の人間による人間のための人権を確立し、商品ではない、人、本来の自由、平等が実現するという本元の弁証法的唯物史観マルクス主義をテーゼの形で、簡略的に要約主張したものにすぎないのではないかと考えられるのである。<sup>(5)</sup>

卑近ない方を許されるとすれば、この二段階革命論は、現実の適応として、二月にロシアで、ブルジョア革命が生起し、あと、半年ぐらいでプロレタリア革命の条件が成熟し、ととのって同じ場所で、社会主義革命が起り、成功するということになり、そんな魔法のようなことが起ることは、考えられることも、できることでもないといわねばならない。

更に言えば、この説に従えば、革命についての二段階論は、資本主義をいままたように容認し、その発達をはかる

のであるとしても、それは、その後に生起させる社会主義革命成功のための条件としてそうするのであるということになって一体、牛や豚や魚類を食用に供するために養殖して肥えふとらせることはできても、資本主義をプロレタリア革命成就のために発達させ、資本主義と社会主義をそんなに意図的にとっかえることはできる相談ではないのではないかといわねばならない。二段階革命論は、ロシア革命の現象を皮相的にみ、結果論を原因論にさかのぼらせてマルクスの原理を誤って解釈した愚論であるといわねばならないと考えられる。

- (1) *Marxism in Russia, Key Documents 1879-1906*, ed. by Neil Harding, trans. by R. Taylor, Cambridge University Press, 1983, Second Draft Programme of the Russian Social Democrats, (1885) G.V. Plekhanov, pp. 81-4. プンペーンに於ては、やはり、ロシア社会民主主義の革命的性格と運動についての強調はあるが、革命のための産業労働者の育成を主張し、彼等の運命は、共同社会生活の一層の近代的、自由主義的形態の発展に全く依拠している、という。この場合、農民の共同社会の解体から産業労働者が生れると説いて、ヘルゼン、チェルニシウスキーの「人民党」理論から乖離しているのが、注目される。絶対主義の打倒が、彼等の第一の政治的任務であり、その具体的目標は、民主主義的憲法の獲得である。①選挙権、被選挙権の確立、破廉恥犯の排除、②最貧層からの議員選出、③普通無償一般義務教育、④人格権、居住権、⑤移動、職業の自由、⑥良心、言論、出版、集会、結社の自由、⑦人種的、宗教的平等、⑧人民軍を以て常備軍にかえる、⑨民法法の改訂、財産による差別と人格の尊厳と背馳する刑罰の廃止。これらが、その内容であり、これを以てみれば、この主張は、少しく過激とはいえず、全く民主的(ブルジョア)憲法の条項そのものとも言える。その他改革として、①土地の農民共同自治体(peasant communes)への償還、割当制廃止の権利、要請に基づいて農村自治体(village communes)の温存、②累進課税、③労使関係の法的規制、労働者要求の検討機関の設置、④農工鉱業生産協会への国家補助等が、求められた。これらも全く社会民主的要求以外の何物でもな。

- (2) V.I. Lenin, *Selected Works*, Vol.I, in three volumes, Foreign Publishers, Moscow, 6th print(revised one) 1977, pp. 108, 132 and the following. ノーリンに於ては、その強調するところは、根本的には「プロレタリアート革命で、例えばス

トライキについて、一八七〇年代、八〇年代に比し、九〇年代のそれらは、階級意識に目覚めるところ多いが、その戦術は、労働条件、労働場所、工場等の状態の暴露に終始して、ロシア社会民主党の動きも、これら工場状態の暴露を組織化する仕事に没頭しているにすぎない、とのべている。またこうも言う。労働大衆の意識化は、労働者が、知的、倫理的、政治的生活の全部面にわたって、すべての他の社会階級を観察し得る政治的事実と出来事を学び、人民のあらゆるクラス、層、グループの全部面にわたる生活と行動に唯物論的分析と評価を与えることを学ぶのでなければ、それは決して純粹な階級意識を持ち得たとはいえない。労働者階級の注意、観察、意識を排他的に、或は、主としてというだけにしても、労働者階級それ自身のみにより向ける人は、社会民主主義者ではない。労働者階級の自覚というものは、……政治生活の経験から獲得されたあらゆる種類の近代社会階級間の関係についての実際的理解というものと切りはなせなく結合しているものである、と。こうしてレーニンは、ここでもこれらの理由からして経済闘争は、政治家が主張するところ、頗る、その実際の意味に於て、危険であり、反動的である、としている。こうなると全く労働者階級の意識獲得問題は、嚴重、嚴肅、嚴格なもので、何を言っても直ちにレーニンにたたかれそうで、うっかりそのなかには、踏みこめないという感じが強い。レーニンは、この他、経済主義と経済主義者との闘争、農業、農民問題についての彼等の反マルクス主義的見解の批判、労働運動に於ける彼等の日和見主義的戦術への攻撃とか、彼等に対し、種々の嚴酷な理論闘争を展開している。

(3) Ibid, pp. 546—48. チェルニシウスキーが逮捕された時、これを政府の当然の防衛措置だとうそぶいた者もいたが、ヘルゼンは、何時も、哀れむべき種類の、雑草のような、盗賊団やギャングの一味(政府)をとがめるなというクラゲのようなやからにはいるものだと言った。……ヘルゼンを記念することに於て、我々は三代の世層、三つの階級をみる。貴族と地主、デセンブリスト、そしてヘルゼン。彼等は民衆からはまだかけ離れていた。しかしこれらの革命家の努力は、空しいものではなかった。デセンブリストはヘルゼンを覚醒し、ヘルゼンは、革命的アジテーションの仕事をはじめた。この仕事は、チェルニシウスキーから Narodnaya Volya に至るまでの革命家によって、とりあげられ、拡張され、強化された。彼等の民衆との接触は、緊密化した。彼等は嵐を呼ぶ若き先達者である。ヘルゼンもそう呼んでゐる。しかし大事なことは、それは、嵐そのものではないということなのだ。その嵐とは、大衆の直接行動である。その先頭にゐるのは、唯一の革命クラスであるプロレタリアートであり、彼等は、はじめて数百万の農民を革命的闘争にかりたてた。その第一の嵐は、一九〇五年のそれであった。プロレタリアートは、ヘルゼンから学び、ロシアと國際的革命に於ける種々の階級の役割をたしかなものとするを知った。

こうして彼等は、あらゆる国の社会主義労働者——胸くその悪くなるツァリスト君主を打倒した——との自由なる同盟へすすむ。ヘルゼンは、彼の開放されたロシアの言葉を大衆に語りかけた最初の人物である。これらの言葉は、レーニンによって一九二二年五月にかかれており、バルカン戦争前夜の欧州で、レーニンは、この時は、ヘルゼン、チェルニシウスキーとともに（勿論精神的、理論的に）広汎な社会主義陣営の結集を呼びかけている。

- (4) *Main Currents of Marxism*, Leszek Kolakowski, 2, the Golden Age, trans. from the Polish by P.S. Falla, Oxford Univ. Press, 1978, reprint 1982, pp. 362-73. トルマス主義は、ロシアでは一九世紀末まで、自由主義と社会主義と相と手に手をたざさえて進んでいた。それが明確に区分されるのは一九〇〇年を迎えてからであった。教条的マルキシスト (Legal Marxists) と呼ばれる人々には、Pyotr Berrgardovich Struve (1870-1944), Nikolay A. Berdyayev (1874-1948), Mikhail I. Tugan Baranovsky (1865-1919), Sergey N. Bulgakov (1871-1944), Semyon L. Frank (1877-1944) 等がある。彼等は、史的唯物論者であったが、哲学的唯物論とは無縁であるとし、カント派、実証主義学派と親縁した。マルキシズムは、歴史のプロセスを科学的に解明するものと解釈し、道徳的原则の確立とは関係がないとした。重要なことは、一九〇〇年以後自由主義とキリスト教哲学を重視し、政治的自由と、民主的の制度とは、それ自身価値があり、労働者、農民、インテリとそして文化的発展のために、資本主義の下で政治的、経済的の改革ははかられねばならず、かつそのことが可能である、とした点であった。マルキシズムは、彼等にとっては、実際の武器であるよりは、社会の理論であった。彼等はマルキシズムの価値論、利益率低減論、そして農業への資本の集中を批判した。それは、一つには、ドイツの改革主義を先取りするものともまたそれを裏書きするものであるともいわれた。彼等は、マルキシズムを損ったが、またそれをポピュラーなものとするにも貢献した。それは、更に、ロシア改革主義派のアナロジイだといわれる。とにかく彼等は、世紀の代り目まで、自由主義改革派の先達であり、社会主義派と自由主義派が分裂するまで、一つのグループとして活躍したのであった。

- (5) *The Bolshevik Revolution*, E.H. Carr, 1, 1917-1923, Pelican Books, 9th Reprint 1986, the Foundation of Bolshevism. *The Communist Manifesto*, K. Marx and F. Engels, Penguin Classics, first published 1888, Penguin Books, 30th Reprint 1988, Introduction by A.J.P. Taylor. *A Farewell to Marx*, David Conway, Penguin Books, 1987, pp. 21-45. マルクスには、その思考方法に、二段階革命的発想が随所にみられる如くである。国家と社会の関係について次のような言説がある。これはヘーゲル (Georg Wilhelm Friedrich Hegel) の論理への批判の形をとっている。ヘーゲルは、国家機構

をロシアに範をとり、以下のようにのべた。統治制度として王、行政事務 (civil service, bureaucracy)、立法府 (legislature) があり、社会階級として官僚 (universal class)、農民 (地主、農民)、実業家階級 (business class) がある。立法府に王は一人格のそれとして代表され、官僚は、行政大臣に代表される。その他の階級は、議会 (二院 Parliament, Estates-Assembly, upper house and lower house) に拠る。上院は土地貴族から構成され、彼等の土地は、世襲制で転売できない。下院は、実業家階級に占められる。但しヘーゲルによると、彼等は選挙で選出せられない。国家と私的市民のギャップは、あまりにも大きく、下院議員は、種々の商業、職業団体から任命されることとなる。こうして彼等は、その職業から昇華して、国政に参与する。しかしここに現われるものは、各階級、各範囲に於けるエゴイズムである。そこには利己がうずまき、あらゆるレベルの自己満足の追求のみがある。

マルクスの批判は、ここからはじまる。ヘーゲルは、単に国家と統治機構の形式を示したにとどまる。この国家に於て、封建的規則を破るものは、政治的解放であった。しかしこの解放の結果は封建法を打破したが、そこには、政治的デモクラシー (political democracy) が確立されたにとどまり、利他と全体的顧慮に常に関心を払う真の人間 (species-being) は出現しない。政治的解放 (political emancipation) は、二つの革命、一七七六年と一七八九年に達成された。しかしそこに華ひらいたものは、平等の権利、自由、財産権、良心の自由にすぎなかった。それが、米國とフランスの現実であった。そして尚そうである。かくして国家は、マルクスの言う species-being への軌跡とはなり得ない。政治的デモクラシーは、人を——総ての人を人権主体とみ、最高の存在とみる。しかし人は、そこでは、不毛な非社会的な、付随的な、正に彼である、腐敗した、そして非人間的な要素と条件にさらされた存在にすぎない。それが、この社会制度の全体である。マルクスは、ここで翻然と共產主義社会への思考にすすむ。ここからマルクスの共産党宣言が生れる。真の人間、真のデモクラシー (true democracy) とは、自分が他者のなかの一人であることを考え、現実として種の意識のなかに生活する人、他者のためと彼の社会への関係のなかで、自分の有用性を考え、彼自身の本質の存在を彼の存在とする人である (Feuerbach)。その人は、ヒューマニティに向かって全心全霊を以て生きる。

こうしてマルクスの共産主義社会が構想される。ここに於て、我々は、政治的デモクラシーの達成と封建法の払拭、そして真のデモクラシーの達成をいうマルクスの思考の段階的 (二段階に限らぬとしても) 発想に着目しなければならぬのである。それとともに科学的、史的、唯物論のなかに、ヘーゲル、フォイエルバッハの人間哲学の強い思考を感得しなければならぬ。こ

の真の人間を作り出すことに於て、ダーウインの適者生存の原理を強権国家造出の政策とした一九世紀、二〇世紀初頭の実践とともに共産主義国家権立の推進力があつたとみるのは、ひがめであろうか。尚、このヘーゲルに対するマルクスの批判のなかに、真のデモクラシー、平等、自由の社会的人間構想が強く脈打っていることに注意が払われなければならない。

## 六 社会民主主義者カール・マルクス

さてここで、社会主義革命についてのマルクスの説く真意をさぐらねばならない。マルクスは、ただ単に所謂ボルシェヴィキ的革命論とその実践活動——即ちマルクス・レーニン主義——をのみこれにつき、説いていたのかということが、大きな課題となるということが、ここでの問題内容となる。即ちマルクスの革命主義の再検討である。そしてマルクスは勿論、甚だしく複雑でまた短絡的ではなく、そこに彼の説くさまざまな思想の角度が——革命とその実行についても——みられるのであるといわねばならない。即ちマルクスは、所謂マルクス・レーニン主義の革命観のみ主張していたのではなく、そこに所謂社会民主主義的の革命観、平和的の革命観がみられるということであり、これを如何に取り扱うかという甚だ大きな、そして興味ある問題が存在しているということである。

### マルクスと革命

毛沢東は、こういった。「政治的力は、銃口から生れる。すべての共産主義者は、真実を把握しなければならぬ。我々の原則は、党が銃を支配することである。……銃を手中にすれば、我々は、党組織をつくることができる。……我々はまた、幹部を養成することもできる。学校を、文化を、そして大衆運動をつくり出すことができる。……あらゆるものは、銃口から生れ出る」と。<sup>(6)</sup>マルクスも、革命運動家として、この原則をたてるころがあった。党と

## 説論

は、少数派の依拠すべきものであるというのが、彼の主張である。マルクスは、その運動の中心に資本主義を倒し、社会主義社会を実現するという目的をすえていたことは、ここに喋々するまでもない。その社会主義の実現を彼は、多数派の意思を無視し、またはこれにさからって、社会主義に身をささげつくした少数の党員が、暴力に訴えて、実行するのであるとしている。この例証として次のことがあげられている。即ち、マルクスは、二、三百人の革命主義精鋭からなる「共産主義者連盟」(the Communist League)に所属して革命運動に力をかしていたこと、更に、所謂二段階革命論(法学論集、第二二号所収拙稿、「ロシア・メンシェビキの系譜とペレストロイカ」(一)参照)に於ける主張が、それと重なるということ、マルクスは、一九世紀半ば、即ち一八四八年二月革命とその挫折の時代、特に革命妨害派に武力を用いて対向することを革命派に懲罰していたこと、更に、一八五〇年に、彼は、暴力派のブランキー党(the Blanquists)と同盟し、更に同年四月、「全世界革命派共産主義者協会」(the Universal Society of Revolutionary Communists)を設立したこと(その会員は六名で、当然秘密組織であった)等。即ちこれらの例証によってマルクスが、前衛的闘争党としての共産主義者の集合を主張していたことは、疑いないとされるのである。(これはつまり、前節までのマルクスの所謂マルクス主義解釈の中核ともなる基礎理解である。)

しかしマルクス自身は、あくまでも文筆の徒として終始し、自ら革命運動を唱道しながら、その中に加わって、一兵卒として行動することからは、程遠かったと思われる。即ち、例えば、自ら折角つくった共産主義者連盟を彼は、一八四八年六月に解散してしまっているのである。そしてそれが、連盟組成員の手で再建されても、以後、それに決して加わらなかったのであった。しかしその連盟の要請で、そのための政治プログラムを書き上げたのが、一八四八年一月に完成した「共産党立言」(The Communist Manifesto)であった。



レーニン (Vladimir Ilich Ulyanov Lenin) に「ついでに、彼は、このマルクスの労働者階級の前衛党としての共産党と共産主義をその原則の上で確立した革命家ということになる。彼が口舌の徒でなく、偉大なる実践家であったことは、いうまでもない。レーニンは、マルクスの所論にたち、四六時中党活動に専念する規律された少数党の存在を社会主義実現のための必須不可欠の前提条件（前衛）とした。労働者大衆の存在は、これら前衛党の指導と活動なくしては、単なる労働組合的意識と体制内に於ける経済的改革の要求に終止してしまふ、としたのであった。そして更に、レーニンは、こうもいっている。「彼等が、労働者の階級闘争にあたえることのできる援助は、……労働者の階級の自覚を発達させること、……そして、労働者の組織化に助力することではなければならない。……こうしてわれわれは、資本家階級に対する労働者階級の闘争が必然的に政治闘争でなければならぬことをここに見出すのである」と。<sup>(8)</sup>

#### マルクスと平和主義革命

所謂、世に言うマルクス・レーニン主義は、右にあげた所論である。この武闘的革命論は、単純、明快であって、その限り、何等の疑義もない。武力的集団が革命という目的に向かって規律をもって突進する。それだけのことであり、成功、不成功の条件を言い出すと限りがないけれど。しかしマルクスは、ここにのべた程しかく単純ではなく、そこに彼による平和的革新主義というものが、明確に、あるのである。即ちマルクスは、所謂マルクス・レーニン主義のマルクスだけでなく、社会民主主義の平和的手段による革命達成のための議論を展開したもう一人のマルクス——社会民主主義のマルクスをもっていたということである。これは、創立者、創造者には、よくと言うより、必ずみられる矛盾するまでの条件の多様性と広範性のしからしむるところであろうと解釈される。例えば、中国革命の父孫逸仙

(孫文 Sun Yat-sen) は、五権憲法(立法、行政、司法、考試、監察)と四権(選挙、罷免、創制、複決)をたて、これを三民主義(民族、民主、民生主義)の原則で運営するとして、法治と法の支配を言明、これを打ちたてたが、そのなかには、天の声に聞く易姓革命の思想強く、もし議会が、国民の意思に反した実行をした場合、例えば、そこを通過しなかった法律案を人民の「公決」によって法律として成立させ得る、としている。また彼は、ソ連ボルシェビキ革命と日本明治維新に同時に強く影響を受け、産業政策に於ては、外国資本主義侵略の排除を声高く呼号するとともに一方、外国資本と技術、外国人材の輸入を唱導して、中国産業革命を遂行、その発達ははからんとしたのであった。この前者の思想は、中国共産党が、後者のそれは中国国民党が、それぞれ、大綱として受けついでゆくところである。<sup>(9)</sup>

孫文かくの如し。そして、マルクスはもっと短絡的にプロレタリアート独裁の確立のために、暴力革命を唱導するとともに平和的手段によるその達成を主張した。従来マルクス・レーニン主義の理解からすれば、全く矛盾の見解である。しかしマルクス自身は、これをその国々と所、所の状況と歴史、慣習等にに応じて必要の条件を付度して、目的の実現に具体的に努めるべく、その主張の展開をなしているとしているのである。したがって彼自身に於ては、矛盾はなかつたのであろう。

この平和的手段によるプロレタリア独裁——とまでいって悪ければ——社会主義の実現、達成の手段としてマルクスが考えているものは、議会主義と総選挙(universal suffrage)制度である。議会主義に於て、社会主義派が、多数をしめれば、それでは、終りであり、社会主義が実現するというのである。「総選挙制は、英国の労働者階級にとって政治的力と同義語である」。「英国に於て、……政治力を示す方法は、労働者階級に広く開かれている。暴動

に訴えることは、平和的扇動 (peaceful agitation) が、更にスピーディに確実に働くところでは、狂気である」と彼は言い、また「労働者階級は、古き諸制度を支える古き政治を打倒し、新しき労働組織を打ちたてるため、ある日、政治権力を手中にしなければならぬであらう。……」しかしその方法は、一律である必要はない等々と明言している。マルクスは、暴力革命論に於ては、小政党をその中核とし、国家政治に於ける多数派は、必要でないと喝破している。即ちその多数派が、その目的のために獲得できるならば、——即ち、小党派が多数派に転換すれば——問題はそこでも終りをつけ、目的の実現——社会主義社会の実現——は、達成される、としていたが、平和的革命論に於ては、多数派の獲得が、それ自身問題であるとしているのである。即ち議会に於ける総選挙制下の多数獲得が充分に社会主義社会の実現を成就すると主張するのである。そしてこの議論こそは、社会民主主義政党の——その綱領なり、政策なりに種々の相異はあるとしても——一律にそのレゾンデートル (raison d'être) として主張する中核をなしているところのものであり、まさにあやまたずその理論主張そのものである<sup>(1)</sup>。

#### マルクスと議会議主義、総選挙制

社会民主主義と党の歴史 (社会党も含む) も古く——全ドイツ労働者協会 (General German Workers' Association, Lassalle) 一八六三年創立、社会民主的労働者党 (Social Democratic Workers' Party, Liebknecht & Bebel) 一八六九年設立、ロシア・メンシェヴィキ党 (the Russian Mensheviks) 一九〇三年集合等があり、これらをもみてもそれはうなずけるところである。その目的に奉仕する中核的主張は、労働者階級の利益のために、党に結集し、また労働組合、その他諸々の組合の結成に参画するというものから、社会は全体のためにあり、全体の利益とその他の取扱いに重点を置かねばならない、政府の目的は、相互搾取のためにではなく、社会の兄弟愛の確立のため

説  
 めにあるというもので非常に広汎である。しかしこれらの目的を達成するために、彼等は、党に結集するのであり、そのため、これら目的の達成を、党を通じての政治活動、即ち、この場合、議会に於ける多数派の獲得にあると主張するのである。しかしこの社会民主主義派諸政党による議会の多数獲得、究極の社会主義実現という道は、長い間の実践活動あるにかかわらず、時々の政権獲得、ほんの短い期間——例えば、英国に於ける労働党のそれ——、一

九四年 Ramsay MacDonald、一九二九—三一年 the Second MacDonald Cabinet、一九四五—五一年 Clement R. Attlee、一九六四—七〇年 Harold Wilson、といった期間を除いては、政権を手中にすることさえままならぬ、社会主義社会の実現、資本主義社会の打倒などは、とてもこのことにこれによっては、達成からは、程遠いと言わねばならない状態であつて、それは、歴史の証明するところである。マルクスは、しかしこの所論をなした時は、フランス二月革命の際であるから、このような歴史的事実にふれるよしもなく、総選挙制度の確立あれば、多数派獲得は、既定の事実であるとしてにすぎない。これは、選挙制度については、具体的には、英国を考えているのであつて、そこでは、総選挙に対する強い客観的な制度性があり、信頼感もあつて、その上での立論であるということが出来る。これを考慮に入れなければならない。そしてマルクスは、総選挙制度も、当時のドイツ、フランスのように、軍事組織の強大な存在と同じく官僚組織の跋扈あれば、国家制度の変改あるようには機能しない、と言っている。これをみれば、やはり、マルクスの頭のなかには、二段階革命論、即ち、ブルジョア社会の成立、その上での社会主義社会の建設という構想が、常に存在していたという風に思えることを否定できない。

このマルクスの英国に対する信頼、総選挙制度に対する思い入れは、ここでみる限りに於ては、絶対的とまでいいいように思える。底なしの依頼が寄せられている。全く奇妙なことのよう思える。しかし果して総選挙制度と

自由、平等な一般投票で、即ち革命的手段によらずして社会主義社会が建設され、またそこへ政治、社会制度が移行したということが繰り返しになるが、あったであろうか。ワイマル共和国 (Weimar Republic) は、第一次世界大戦という大戦争の結果誕生したものであり、当時のオーストリア共和国も同断であった。中華人民共和国も、同様、第二次世界大戦の結果誕生したものであったことは、ここに喋々するまでもない。問題は、しかして、今後に向けられているようであって、ゴルバチョフのペレストロイカがこの二〇世紀末の地球上に、戦争と革命によらずして社会主義の政治体制を打ち立てつつあるようにみえることから、ここにはじめてマルクスのこの主張の実現が果されたと考えられる。しかしこれとても、一九一七年のボルシェヴィキ革命から共産主義国家の誕生、以来七〇余年を経たことであるから、戦争と革命による社会体制の変革がなければ、これらの移行も全く考えられなかったのである。だから問題は、しかく単純ではなく、それは、もとより輻輳している。しかしもしこれらの今日の社会民主主義とその国家群が、このまま無事に発展し、定着するのであれば、——そしてその蓋然性は、すこぶる高いといわなければならぬが——、そうすれば、社会民主主義者としてのマルクスという表題の如く、彼が平和的・社会民主主義革命達成の太祖であったというテーゼが、それなりに生きてくるであろう。

(6) Marxism and Freedom, Raya Dunayevskaya, from 1776 until today, Columbia Univ. Press, first published 1958, fourth edition 1988, the Challenge of Mao Tse-tung, pp. 288-308.

(7) Karl Marx, The Communist Manifesto, edit. by F.L. Bender, W.W. Norton, 1988, Introduction, Historical and Theoretical Backgrounds of the Communist Manifesto, pp. 1-39. ヘルタースの基本概念とされるものは、次の如くである。歴史の動因としての階級闘争の観念をサン・シモンとフランス復古史学派から継受したマルクスは、次の如く論じる。資本主

主義の発達は、絶えず生長するプロレタリアートをつくり出す。彼等は、その依拠的立場（相互的と考えられる）によって資本主義を破壊し、その場所に社会主義を打ち立てる。労働をリザーブし、工場を掌握し、国家の統制を手中にして、プロレタリアートはブルジョアジーから権力をもぎとり、彼等を政治的、経済的特権の立場から放逐する。こうして彼等は、はじめて真の民主主義——最大多数の民主的支配を打ち立てる、と。しかしマルクス思想には、種々の要素が混在し、その思考体系は、複雑である。この概念そのものに対しても次のようにいわれる。資本主義後社会に関してマルクス以前の如何なる社会主義者も資本主義から社会主義に移行するのに前者に内在する諸勢力、——その一致によって変革は達成される——の分析を完成したものはいなかった。（所謂科学的社会主義は、循環理論ではない、発展理論で、資本主義の運動法則で、それ自身が社会主義に転化するという結論を準備する如くである。）かくしてマルクス前の社会主義は、ただ資本家を説服するか、共産主義の領地（enclaves, colonies）を造成することによってのみつくり出されるシステムであるようにみえる、と。ここでもマルクスの科学的社会主義理論とレーニン主義の相剋がみられる如くである。（法学論集二二・二三号、「ロシア・メンシェビキの系譜とペレストロイカ」(一)、(二)参照) マルクスの所謂科学的社会主義とは、資本主義に本質的に内在する運動法則から社会主義が結果するとする経済理論で、これとレーニン主義エリート革命集団の自発的革運動イニシヤチブとが本質的に矛盾すると考えられるのである。説明は、社会主義社会実現のための産婆役としての革命エリート集団の存在ということになるのであるが、いずれにしても、マルクスが決して使ったことではない、マルクス・レーニン主義というプリンプルで、網羅的・包含的なマルクスの思想体系を律しようとしたところに戦術的意図を除いて、世紀的社会主義理論の混乱を引起した大きな原因があるといわねばならない。これについては尚、註(10)にふれる。

(8) レーニン全集、第二卷、マルクス・レーニン研究所訳、大月書店、一九五四年第一刷、一九七六年第二五刷、九五—一〇〇頁。

(9) 包遵彭、吳相湘、李定一編、中国近代史論叢（第二輯、第一冊）不平等条約與平等新約、正中書局、香港、一九六七年、二六七—六八頁。孫中山選集、上下兩冊、中華書局、香港、一九七四年、下冊、五二八—二九頁、上冊、一九二〇、五六—七〇、七三—八一、八四—八九、一〇四—一八五頁等。

(10) F.L. Bender's Communist Manifesto, op. cit., Introd. Karl Marx, the First International and After, edit. and introduced by David Fernbach, Penguin Books, first published 1974, reprint 1981. Karl Marx, Surveys from Exile, edit. and

introduced by David Fernbach, Penguin Books, first published 1973, reprint 1977 and 1981, pp. 264-77.

マルクスの根元的科学的社会主义理論というのは、資本主義は過剰生産が本来的であるということ、労働者階級の盛行と増加は、資本主義の発達によるという思想からきている。資本主義の発達なければ、労働者階級の内容も発展もないということである。ここから右述の如き理論が発展する。こうして労働者と資本家は相互依存、他なくして一はないという関係となる。生産力の増大と労働者の多数増加が、この関係のなから資本主義を通じて封建主義から社会主義(共産主義)への移行となるというのである(two-stages transformation)。一八四八年の革命から一八五〇年の七ヶ月間を除いて、マルクスと共産主義リーグが、一貫して封建主義と絶対王制に対する階級闘争に於て、ブルジョアジーを支持したのは、この科学的社会主义理論に依拠する思考の結果であった。

当時の共産主義の社会改革理論は、多くの要素が混在していた。二月革命当時のドイツ共産党の要求は、次の如くである。①共和国。②二歳からの選挙権、被選挙権。③代議士の有給制、手工労働者議員。④人民軍。⑤無料法律サービス。⑥全封建的徴税と労役(dues, exactions, corvees, tithes)の無償廃止。⑦王領、封建領土、鉱山、炭坑等の社会的・科学的大規模開発。⑧農地抵当権は国有、利子は農民によって国家へ納付。⑨有効農事技術を持つ地方での地代、手付金等は税金として国家へ納付。これらの施策は、農業生産性を損うことなく農民、小農等の負担軽減を目ざすものである。農民、農場経営者でない地主は生産性なく、したがって彼等の消費は、保証されない。⑩国有発券銀行。紙幣を金銀貨と変える。後者は外国貿易に用いられる。これらによって信用制度が人民の利益として保証され、保守的ブルジョアジーの利益が、革命のために利用せられる。⑪あらゆる交通手段、道路等は、国有化され、非有産階級によって全体の利益のために使用される。⑫公務員給与は一律、家庭を持つ者は高額(higher)。⑬教会と国家の絶対的分離、牧師は彼等の会衆に支えられる。⑭相続権利の削減(curtailed)。⑮累進所得税。消費税の廃止。⑯国営仕事場、労働者と障害者の生活保証。⑰無償普通教育。これらが、ドイツ・プロレタリアート、小農民、プチ・ブルジョアジーの名によって要求せられた。これらは、種々の要素の混在した要求と先にのべたが、これは、レーニン・スターリン主義による共産主義を見聞したものの言説であって、ナイーブな真実は、自由主義、平等、人権、人道主義等を含むブルジョアのこれら主張が、真の社会主義そのものであると考えねばならないのである。

(11) The same works as cited in note 10. 例えば、一八四八年前後、労働者の大半を吸収していた英国チャーチスト(Charlists)

運動の綱領のなかに総選挙への結集がある。投票と有給制、毎年の選挙等が要求された。総選挙は、英国労働者階級のための政治的力と同義語である。そこでは、プロレタリアートが人口の大部分を形成し、長い地下活動としての内乱に於て、階級としてのプロレタリアートの自覚(意識)が獲得された。英国では、農村地帯に於てさえ、もはや農民(peasants)の存在を知らず、ただ、地主、産業資本家(農業経営者 farmers)、そして雇傭労働者の存在のみが知られている。英国に於ける総選挙制実施は、これらよりして、欧州大陸に於てその名を冠せられる名誉を荷う如何なるものよりも、よりすぐれて一層社会主義的施策となるのであろう。

## 七 メンシエビイキ諸流派

マルクスの教義としての革命遂行論は、多様性があり、そのことについて、ここに縷々論じたのであるが、これを真とすれば、もう一面のマルクスを含めて、ロシアに於けるメンシエビイキ社会民主主義的革命的華々しさも決して故なきことではないと思える。問題は、マルクスの思考を、繰り返しになるが——、所謂マルクス・レーニン主義のそれに嚴重に限定して、それ以外を一切認めないというかたくな態度が、ロシア・メンシエビイキと社会民主主義論を肩身のせまいものとしてしまつたのである。そしてそれは、今日、当然ときはなたれねばならない。そして尚、このもう一面のマルクスの理論を踏まえて、ロシア社会民主主義的理論につき、これを今すこしく考究すると、次の如くなる。

### 経 政 家

メンシエビイキ的思考の一つの型として教条的マルクス主義者があげられたが、この派には、ストルプ (Peter Struve)、ブルガコフ (Bulgakov)、ベルヂアエフ (Berdyaev)、そしてツガン・バラノフスキー (Tugan Bara-



novsky)等が属し、経済問題、ギリシア正教、工場労働問題等を論じ、社会民主主義的論陣をはった。<sup>(12)</sup> マルクス主義の反封建的、反独裁的、また反外国支配を勿論、背景としたが、その主張のなから、直接的革命戦略は影をひそめていた。彼等の実体は、ブルジョア民主主義者であり、マルクス主義を標榜しながら、ブルジョア自由主義を求めていたと言える。<sup>(13)</sup> そしてなお、教条的マルクス主義者よりも、尚一層社会民主主義者であった一団の思想家さえ、そこに存在していた。これも世紀の転換点にあらわれるが、プレハノフ (G. V. Plekhanov) はいうまでもなく、ここでは、マルトフ (Julius Martov) 、ポトセフ (A. Potresov) 等がいる。彼等は、経済主義をかかげ、「政治家」と呼ばれる。経済と政治を峻別すべしとし、労働者は、経済的目的の追及に力をいたし、政治は、党指導部に全的に依頼すれば足りると主張した。経済条件の充足のために活動し、階級闘争を捨てて、経済目的達成のためには、労働組合運動に依拠すべきであった。すべての社会改革は、現体制内で行い、党指導部の政治改革もこの範疇に限らるべきであると主張し、その活動は、ブルジョア自由主義者のそれであるべきで、彼等との間に逕庭の差はないとまでのでた。

勿論マルクス主義の影響を受けてのことではあるが、政治的要求として、自由権のそれをかかげ、良心、言論、出版、集会、結社の自由、自由・平等の総選挙、教育の開放、判事の選出、教会と国家の分離等を主張した。経済的要求としては、農民にとっては、解放時、彼等が改革の名の下に収奪された狭小ではあるが、彼等の固有の所有地の返還を求め、労働者のための要求として、八時間労働制、小児労働の禁止、婦人労働の制限、老齢・障害者保険、罰金の廃止、現物支払いの廃止等をかかげた。まことに多彩な要求であるといわねばならない。そこには、やはり、自由、平等、人権、人道主義、総選挙、社会保障等のブルジョア自由平等主義の言説が展開されている。これらを見て、

この期、ロシアに於ける明確な社会民主主義的思想とプログラムの厳然、広汎なる存在を知るのは、ただに、筆者一人のみではないであらう。<sup>(14)</sup>

### ロシア社民思想とプロレタリア独裁

ロシアに於ける社会民主主義的、経済主義的イデオロギーの形成が、ヘルゼン、チェルニシウスキーから、教条的マルクス主義者、経政家等の思想から育まれたことは、ボルシェビキ革命の成功という観点からみて意義深い。これら社会民主主義的思考と経済主義が、革命前にロシアで盛行し、レーニンさえこれに同調的、合意的となるのは、やはり、一旦は、そこに於て、先にふれたような、こういったメンシェビキ思想と思考の大きな流れが、存在したということに他ならないのである。ボルシェビキ革命成就の後、ロシア史観は、ボルシェビキのそれに統一されてしまうところに、これも先述の如く大きな問題がある。しかしここで主張したいことは、このメンシェビキ思想、自由・平等—人間的意味に於てのそれであって、ただ商品の価値、価格と、商品流通のためのそれらではない。—に對する人間のあこがれと欲求は、何処の国、いずれの場所に於ても人間の本源的なそれとして厳然として存在し、また存在しつづけるということである。こうして社会民主主義的なメンシェビキ思考の存在がゴルバチョフのとくペレストロイカと如何に関係するのか、ペレストロイカそのものであるのか、その外縁を形づくるものなのか、それともその先蹤なのであるか、興味とともに、疑問は複雑である。勿論ペレストロイカのプログラムは進行中であり、その一々の行為と結果について云々することは、勿論、今日、時期尚早で、科学的でないとは言える。ただここには序文にのべた如く、ゴルバチョフの著書としての「ペレストロイカ」(Perestroika, New Thinking for Our Country and the World, Mikhail Gorbachev, Harper & Row, 1987.)に内在する思想とプログラムの内容について、こ

れらメンシェビキ思想、プログラムとの関係をさぐるというのが目的であり、そこに小論の範疇も限定される。

尚ここに興味深いのは、教条的マルキシストも経政家もともに本来的には革命派であることであり、メンシェビキは、ボルシェビキが、ここに所謂第二革命にたちあらわれるまでは、それを含む、ロシア革命の推進者であったことである。そしてここには、ロシア社会、経済的現状分析として、資本主義の発達、ロシアでは、相当段階にまで進んでいるという認識と、それへの革命観が存在したということである。このため、労働者の数も増大し、その団結への傾斜もするどく、種々の産業的矛盾があらわれている。しかし技術的進歩が資本主義的生産形態を社会主義的なそれに転換する契機を生じさせ、階級的分化が止揚されて、一つの階級による他の階級の搾取がとめられ得るとしたことでプロレタリアートによる権力の掌握が唱道されさえして、この社会民主主義的社会発展、経済発展第一主義の理論のなかに、プロレタリア独裁のプログラムが、既にして出現していることが認められ、このことは、頗る興味深く、問題は、複雑であると思わせるに充分である。

ここに至ると、ロシアに於ける独裁観念が非常に本質的なものであり、また根強く、先にふれた、ロシアの自然現象のなかにさえそれを認識しなければならぬのかとさえ思わせる。

- (12) Marxism in Russia, op. cit., Manifesto of the Russian Social Democratic Labour Party (March 1898) by P. Struve, pp. 223-24. ロシア労働者階級は、彼等の外国の同志が、何らの妨害なく享受している事柄 (things) を欠いている。即ち、参政権、言論、出版、集会、結社の自由、——一言で言えば、西欧の、そしてアメリカのプロレタリアートが、彼等の立場を改良し、そして同時に彼等の最終の解放——社会主義のために私的所有権に反対するための闘争の武器と手段のすべてを、である。政治的自由は、ロシア・プロレタリアートにとって健康な呼吸のために空気が必要な如く必要である。それは、部分的改良を積み上げ、最終的解放をかちとるための、そしてその自由な発展をはかるための基本的絶対条件である。

説 (13) Main Currents of Marxism, Leszek Kolakowski, 2, Golden Age, op. cit., pp. 66-76. ツガン・パラノウスキーに關して、彼とローザ・ルクセンブルグ (Rosa Luxemburg) との資本主義の運命 (資本主義は、限りなく發展するか (前掲拙稿参照)) に関する議論がある。次の図式を考へる。

[1] Department I:  $4,000C + 1,000V + 1,000S = 6,000$   
 Department II:  $2,000C + 500V + 500S = 3,000$

D.I.=production of means of production. D.II=production of consumer goods. C=tools and raw materials, constant capital. V.=wages, variable capital. S=surplus value. exploitation=100%.

[2] Department I:  $4,000C + 1,000V + 1,000S = 6,000$   
 Department II:  $1,500C + 750V + 750S = 3,000$

[2]の場合、複合再生産の時、Department Iの価値は、五〇〇超過し、Department IIのそれは五〇〇減少する。4,000+1,500と1,000+1,000+750+750. この場合、費消されないSの価値を複合再生産のプロセスに、他の条件を同一として投入すると、全商品の全価値が上がる。この時の、しかし、条件としてこれらが貨幣化されなければならないという絶対的なそれがあつた。議論はここから分れる。ローザは、この価値を吸収するのは、両部門に対する外部の市場、増加した蓄積にみ合つたレートで商品が吸収することが可能なそのみが、資本主義の發展の条件となる、と主張する。そして資本主義の自足的無限の發展を否定する。ツガン・パラノウスキーは、マルクスの説に依拠する。彼は言う。資本家は、集团的に、相互の生産物を購入し合うことによって市場を形成し、消費のレートを上げることによって剰余価値を無限に増大させることができる、即ち部門Iの産業は、拡大して部門IIの産業を増大させ、後者は両部門の労働者群を維持するように増大させられ得る、と。こうして資本主義は、不滅となり、その無限の發展が、可能になる、と。

この場合、両者に共通なことは、賃金部門の再生産への組入れを考慮の外に置いておくことである。マルクスに於てもそれはそうであつた。ローザは、労働者階級の消費は、賃金レベルによって制限されている、とし、マルクスは、労働者は、両部門活動のシステムで、消費のレートを上げることには、何らの手助けをなし得ない、と言うのである。しかしここまでくれば、複合再生産のなかに、労働者賃金レートの増加を組み入れることは、その間一歩、紙一重であるようにみえる。そして事実、この一歩がのりこえられることによって資本主義は民主的レベルによって異常なまでの發展をとげたのである。これを忘

れることはできない。しかし、ここで言えることは、この一步感は、実は、ケインズ、ラスキ、E・H・カーの出現とその理論の実践を見聞した者達に於てのみはじめて言う言えることであるのかもしれないということもまた否定出来ない。

(14) Marxism in Russia, op. cit., On Agitation (1896), A. Kerner and Yu Martov, pp. 192-205. ここでくりひろげられるのは、経済的アジテーションと呼ばれるものである。ここでは労働者階級の自覚が、声を大にして唱道される。そしてそれは、経済的闘争が、その運命の改良を達成するのに明確な不可能性を示すとき、プロレタリアートの闘争の主たる仕事は、彼等のための政治力の掌握となる、ということである。その目的は、社会民主主義者としてその広汎な発展の可能性の前提条件としての政治的自由の必要性の覚醒に、プロレタリアートを導くことである。アイルランドの例が、持ち出される。生活水準の繁栄を維持するための経済闘争は、英国の組織的力との鋭い対決となる。しかし、純粹な経済闘争が、広汎なスケールで実行せられないところでは、政治プログラムを持った階級運動は期待されるべくもない。ここでは、政治的アジテーションのグラウンドが準備されるべきである。労働者の階級の共同利益への自覚、他の階級の利益に対する彼等の反撥——階級エゴイズムの発現——がみられれば、政治システムの改造は、時間の問題である。社会民主主義者の仕事は、現存のただ小規模な必要と要求の基礎の上で、工場労働者の間に絶えざるアジテーションを行い、労働者とその利益防衛のために訓練し、勇気を与え、強さの自覚をうながし、全体を打って一丸とする意識をめざめさせることである。その究極の目的は、現存の政治的秩序を労働者階級の利益になるように改良することである。こうしてここにはこの主張の限りに於て、武力闘争への結集、前衛党の結成、革命のアジテーションといった思想も、行動への推進もみられないと言わねばならないのである。次いでここで言われる行動への綱領は、次の如くである。①理論を確立すること。②指導者は、常に、大衆に一步先んじ、情報に敏感であること。③宣伝を通じ、社民思想と科学的社会主义を大衆に広めること。④インテリと大衆を共働させねばならない。⑤宣伝とアジテーションとの関係への顧慮。⑥闘争(アジ、ストライキ、請願)の手段の明確化。⑦宣伝文学の創造。

#### まとめ

小論に於ては、一党独裁制の転換が、果してロシヤ、その他で達成し得るかどうかを背景として、ゴルバチョフの思考としての「ベレストロイカ」とロシヤ大革命時のメンシェビキ思想の関連をさぐることをこの論究の目的とし

た。ロシアには独裁体制として、ツァーリズム独裁からボルシェビイキ独裁、共産党一党独裁、スターリン・カルトへの系譜が存する。しかし一方では、ツァーリズムに対する民衆観念の変化、転換からツァーへの憧憬、依頼が、その批判、反抗へ転ずる。そしてそれとともにマルクス、バクーニン、プルードン、そしてヘルゼン、チエルニシウスキー、ブレハーノフといった人々の社会民主主義的、経済主義的思想があらわれ、ここにロシアに於ける社会民主主義的改革思想が強力に自らを展開する。

小論に於ては、右のロシア革命思想の二つの流れの存在を考え、その系譜をさぐってここに至った。言えることは、ロシアに於ては、大革命時に、一旦は、これらメンシェビイキ的社会民主主義的改革思想が右の背景から出現して大勢を占めるに至ったということである。ここにペレストロイカとメンシェビイキが如何に関連づけられるかの大きな問題が、顔をのぞかすといわねばならない。小論では、この性格を論究することを目的とするが、ここでは、残念ながらもまずその問題提起ということに限られることとなった。この後の研究は、このロシアに於て一旦は、大勢を占めたメンシェビイキが、レーニンとボルシェビイキと如何に関係してゆくかを見ることとなる。即ち従来のロシア史観は、ボルシェビイキ史観としてレーニン中心の論述が一般であった。これをメンシェビイキの思考のなかから考へ直し、論述することができるか否かが次の問題となるのである。ここにはこれらを指摘するのみとしてこれらにつき大方の御叱正を乞い仰ぎ、次号を期して一旦の筆をとどめる。